

●第1回親子魚釣り大会 参加申し込み者 9月13日で50人を突破しました。

木津川漁業組合に第1回の魚釣りを実行するにあたって後援をお願いにあがりました。理事長の石井さんはブラックバスやブルーギルを釣りに来られる釣り人からも入漁料を頂いているので組合の資金源になっており、組合としてはブルーギル等の駆除を目的にした取組みには賛成できないとの意向をお聞きしました。残念ながら今回の魚釣りについては後援を受けることは実現しませんでした。しかし子供向けの取組は大切さを共感できるので大いに行ってください。しかしこれまでの大きな収入源であったアユ釣りを目的にした料金収入が見込めていないのが現状です。取組のうち大人の皆さんからの入漁料は支払っていただきたいし、学生さんの研究の場合もよろしくお願ひしたいとのことでした。

●昨年に引き続いての子どもカヌー体験の申込者は20組に到達しています。

少し余裕がありますのでぜひ申し込んで下さい。この取組みは無料で実施したいところですが、昨年は有料（子供2000円大人3000円）での募集にもかかわらず多数の参加申し込みがありました。今年も昨年と同様の料金での開催となりましたのでご了解をお願いいたします。銭司での水難事故も今年起きていますので、水難事故防止のための準備体操やライフジャケット装着指導、そして諸注意には特に重視して取組まなければいけないと思っています。朝の遅刻は極力無きようにお願いします。今年はここに出席していただけない申し込みをされていてもカヌー乗船をご遠慮して頂くことに致しましたので、よろしくお守り下さい。

●9月6日事務局会議の後、午後から玉水浜への通路の草刈りを行っていただきました。

春初めにも行っていたのですが、植物の成長は早いもので、早くも通路がどこにあるのかわからない高さに繁茂していました。刈り始めて30分過ぎに急な雨が降りだし引き返せないで、ずぶ濡れになってハンマーモアを運転していただきました。これにより折り返し点の駐車場までの通路の除草は出来上がりました。まだ大きく高いものは残っていますが通路部分は開通できました。翌日の7日の午後からもワンドまでの通路の確保のために太田さんや森島さんが出かけてい下さいました。この夏の2度の冠水で成長していた葦や葛がなぎ倒されてしまっているところで、さすがのハンマーモアの威力は発揮されなくて苦労苦心の連続で大変な人的労力を必要となる作業でした。太田さんや森島さん、ご苦労様でした。ワンドAへの通路は確保出来上がっていると報告をいただき、ワンド周囲の部分や魚釣り場はまだ作業しなければならないとのことでした。次回の除草予定は9月20日（水）13時30分から開始を予定しております。除草作業にお力をお貸し下さる方のご連絡をお待ちしています。

ワンド周りの草刈りのお手伝いをお願いします

1回目:9月20日(水) 2回目:24日(日)

13:30～ 鎌と鋸は用意します

集合場所:玉水橋東詰め広場 目印:のぼり

●週刊ニュース1000号に到達まであと2回となりました。



記念すべき1000号に到達をすべての会員で祝うべきとの事で、写真のようなボールペンを記念品として用意出来ました。出来る限り早く皆様の手元にお届けできますように準備を行っています。

今日までの長きにわたっての皆様のご支援に心より感謝しています。感謝の気持ちとさらに困難を乗り越えて継続活動が図れること、そして多くの会員様のご加入を進めるために活用くださることを願ってお送りさせていただきます。どうぞご笑納ください。今後も里山の会をどうぞよろしくお願い致します。

●手づくり竹サインペン製作の諸道具

が整い始めました。まだまだ趣味の段階で技術的には幼稚なものですが、まったくの素人が持ち合わせの道具を持ち寄り、数人でよちよちと出来るようになりつつあります。製作を手伝ってみたい、との思いがありましたら里山の会事務所にご連絡を頂ければ大変嬉しく思います。少しの時間でもお寄りいただければ幸いです。

この竹サインペンは

- ① 農家の皆さんが放棄地に進出してきた竹林の対策を何とかならないのかとの悩みから出発しました
- ② 身体の不自由な方の手仕事がなくなってきているので、手ごろな作業を求めておられました
- ③ プラスチックごみ対策が問題で使い捨てのサインペンが気になりました
- ④ 選挙の時の記入に木製ペンから竹サインペンになれば自治体の環境対策啓発に役立つのではないかと考えて到達したのがこの竹サインペンでした

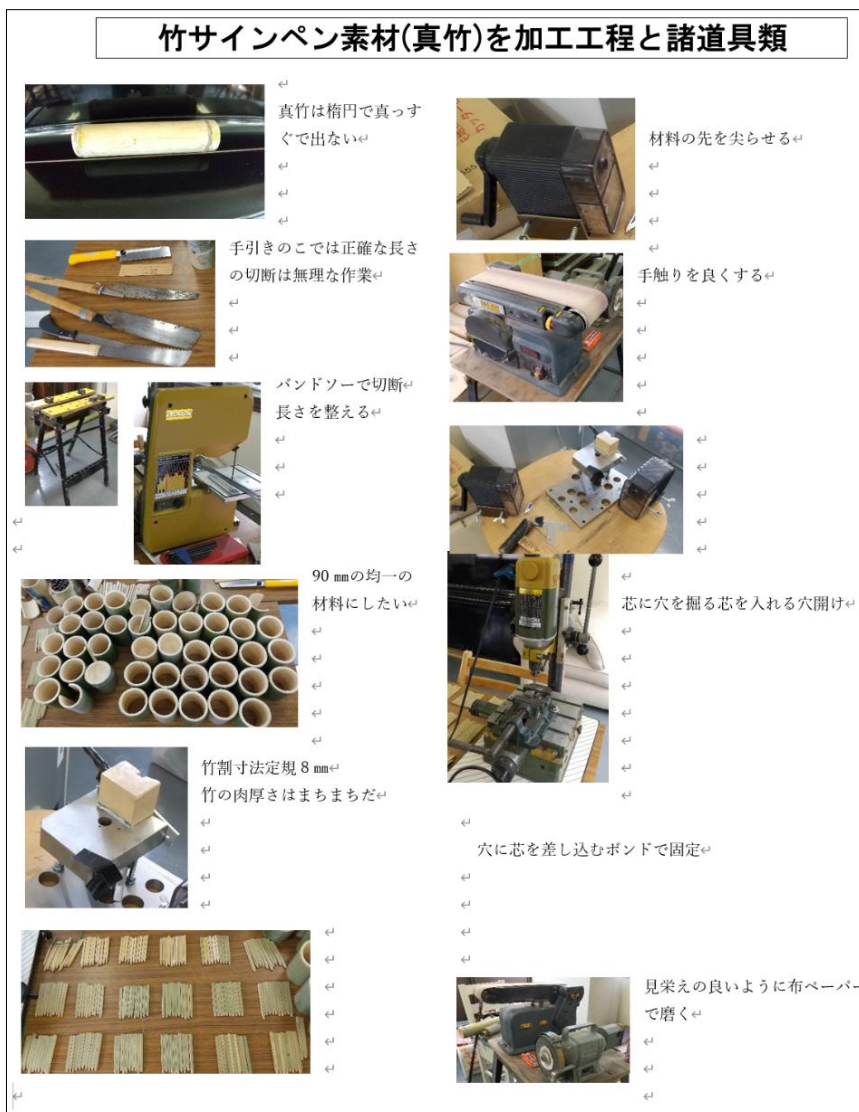
多くの方々からご意見を伺うと

- ❶ 鉛筆の時代ではなくなってきている ❷ 製品に均一性がないので見栄えがしない ❸ 否定的なご意見をたくさんいただきました。

多くのところで、竹の急激な猛繁殖問題となっていますが対応策は試行錯誤で見つかっておりません。高齢化と体力の後退から放置竹林が増加しています。

竹サインペンの利用活用として上記の四つの理由以外にも、プラスチックゴミによる海ゴミやマイクロプラスチックゴミ等による環境汚染防止の啓発への努力のきっかけの自治体のささやかな道具としての活用や、身体の不自由な方々の環境対策への努力への協力、子供たちなどによるワークショップでの利用など、多方面での意義づけ利用が想定されます。

地球の異常気象発生と環境の変化は大きなつながりが考えられます。こうした時、大変重要な環境問題に取り組んでいただける竹サインペンの役割をご理解いただき、一人でも多くの皆さんに



この取り組みをお知らせ下さり、ご協力の輪が広がるように願ってより良い製品へ努力を重ねております。ご利用の知恵を頂戴できれば大変ありがたいです。

この竹サインペンの材料は発明王とされているエジソンが白熱電灯の発明でフィラメントとして使用された京都府八幡市の真竹であります。また 1200 年民衆の力で継続されてきた奈良東大寺二月堂のお水取りの松明の竹送り行事で現在も送り続けられている真竹を主材料として使用しています。

●過日の湯本貴和先生にご講演をいただきました第 26 回里山講演会をラクタイ新聞が大きく報道をしていただきましたので、ご紹介をさせていただきます。

当日の感想を摂南大学生の 1 回生からも寄せていただきましたので紹介させていただきます。

「私は今回、子どもたちと一緒にフタバガキの種をモチーフにしたおもちゃ作りのサポートを担当した。子どもたちは相変わらずエネルギーに溢れており、とても楽しそうに、作品を作り、遊んでいた。その光景を見て、私は「こういう環境があるのはいいなあ」と思った。私は、このような体験をした記憶はないため、このような貴重な体験をできている子どもたちを羨ましく思った。しかし、実際に幼い頃にこのような体験をしていたとしてもそこまで重要に感じていなかっただろう。こうして、歳を重ね、成長して、始めて感じられる後悔であるからだ。このような環境があることは本当に素晴らしいことであり、残していかなければならないと思った。私はそのためのサポートができればと思っている。もう一つ印象に残っていることがある。それは子どもたちが恥ずかしながらも、前に立ち歌っている姿が素晴らしいなと感じたことである。4～5 歳くらいの子から小学生低学年くらいの子が多いように感じたが、それくらいの年代の子は人の前に立って何かをするというのはとても緊張すると思われる。大人でも、人前で何かをするのが苦手という人は一定数いるというのにも関わらず、幼い年齢のうちから人前に立つという経験をしていることは、本当にすごいなと尊敬の念を感じた。子どもたちにはぜひ、人前に立つ経験をたくさんしていったって、人前に立つことを恐れないような子たちになっていったってほしいなと思う。人前に立つことに慣れる一番手っ取り早い手段は経験を積むことだと思っている。そのため、人前に立つ経験を幼いうちからしていることは他の子との大きな差になると思う。総括すると、フタバガキの種作りでは、子どもたちのエネルギーに触れ、歌の時間には、彼ら、彼女らの人前に立つ勇氣に関心を覚えた」。以上で感想を終える。

ぽればれらんどテーマソングを コマづくり、立体アートなど堪能

やましろ「自然と環境」講演会
里山の会

NPO法人やましろ里山(会)光田重幸理事・立中部住民センターせせらぎで開かれ、親子ら約200人の熱気包まれ



南面由子さんが主に新聞紙を使って作り上げた鳥や動物の力作がずらり

毎年3・9月の年2回行つ講演会で各団体の取らんと実践を紹介している。1996年結成の同法人は、自然を大切にする仲間を大きくする「スローガン」に、里山農園(同市水取)や木津川を舞台に子供たちの自然体験活動を展開。2020年5月、コロナ緊急事態宣言で活動したぽればれらんどは同市天王寺まで、雨が降っても気象にこらへる自由な活動を切り開き、なお拡大している。代表の野村治さんが遊び心で、パワフルに幅広いジャンルの理科実験や農体験などの機会を地元親子に提供。



ぐるぐる回れ〜ぼくの、わたしのコマが一番回んで!

南・同志社・京都芸術の3大学と協力し、学生たちはぽればれらんどをフィールドにボランティアやテーマ学習に積極的に取り組んでいる。この日は、普段の講演会に止まらず、野村さんが旗振りして盛りだくさんにパワアップ。事前に未就学児と小学生までの75人と親子85人が参加を申し込んだ。はじめに、1階メインアリーナでは日本生態学会の前会長で、きょうと生物多様性センター長・京都大名誉教授の湯本貴和さんを講師に迎えたタイトル「生き物はいろいろ」の基調講演があった。この中、エネルギーにあふれる子供たちは1・2階の各部屋でこま回



歌詞も覚えたでーぽればれらんどテーマソングに歌声を合わせる

てると早速、両手をすり合わせ真剣なまなこで、回数を友達と競い合つた。分解した洗濯ばさみを材料に、シール、輪ゴムも使い制作した発射台から解放された熱帯雨林の地ゆかりの種子は特徴ある羽根が回転するように落下。手作りした子供たちは、舞うように降りる種に目を輝かせた。音楽ルームでは、「あそびにきたよののりにふしぎいっばいかくれてる」で始まるテーマソングに歌声を合わせる子供たちの中に歌詞カードを見ずにソウで歌える子もいて、日ごろの練習の成果を見せた。アリーナ後方では、南面由子(かみめん・よしこ)さん、京都市伏見区Ⅱの新聞紙アートを展示。ヨーロッパで展示を開く南面さんは新聞紙を材料にした立体造形を始めて9年。子供たちが、背中に乗れるフイオンに胸躍らせ、白孔雀や龍、ラッコ、ワニちゃんなど種類も豊富な作品に注目を寄せた。このあと、アリーナで幼児・児童・大人の部に分けたま回し大会や合唱ステージ、三木耕太郎

くん・川ガキ団の活動報告などもあった。(2日)